

山と博物館

第36巻 第9号 1991年9月25日

大町山岳博物館



鹿島槍あゝのころ 写真と文 伊藤一武

私が風景写真のモチーフを主に求めているフィールドは、この大町周辺です。何十年も見馴れた風景ですが、春夏秋冬それぞれに変わった顔をみせてくれます。ことに毎朝夕眺める北ア山々は、私の大好きな被写体です。その美しい山々を見るとき、当時よく登った鹿島槍ヶ岳二八九〇米にまつわる「鹿島のオババ」を思い出します。

大町市平鹿島の山宿の主人、狩野治喜衛さんの妻きく能さんです。明治二十三年生れと聞いたとき能さんは、年老いてはいましたが、訪れた登山者たちの記憶はたしかで、昭和初期から始まった鹿島槍登山史の中で、この山宿で世話をした登山者一人ひとりを「あの人は……、この人は……」と確実に覚えていました。いわば、鹿島槍登山史の「生き字引き」とも言えましょう。

オババは、「この山は、登る人がおどろくほどふえたことをのぞけば、昔も今も変わりないんだね。ここには、おかしな登山者はこないし、ほんとに山好きで登りに来る人ばかりだね」と、ぼつりぼつりと語ってくれました。

鹿島槍は、この宿からさらに入った鹿島槍から急峻にそぼだち、鯉岳、穂高連峰と並んで、登る人の興味をそそいでいます。南峰、北峰の二つのピーク、その間をゆるやかな形のつり尾根がつないでいます。その美しい山容からも、登山を始めた若者たちは、一度は訪れる山だと思えます。しかし、鯉や穂高とちがって、「大衆登山時代」の今でも、登る人はまだ限られた数のようです。鹿島のオババの言うように、ここではまだ昔ながらの登山者気質が残されているようです。かつては大町から半日ばかりで歩いた登山口には、今ではバスが入り、タクシーが荷物を運んでくれます。「自動車がくるようになってから、うちに寄ってくれなくなった登山者がふえたのがさびしい。けども、ほんとうに山が好きなたちは、かならず寄ってくるだいな」オババは、登山とはただ山に登るだけではない、たとえば、ふもとの人たちとの気持ちの交流というか、登山者の「心」の問題を、なつかしみながら語ってくれたのを今でも思い出します。この写真は今から二十七年前の七月三十一日、快晴の日に鹿島槍へ登った時の一枚です。冷小屋を出て布引岳へ向かう途中で、ふと見つけたシナノキンバイです。そのあまりにも可憐な美しさに、ついシャッターをきりました。

(大町市在住)

慕士塔格山(ムスタীগアタ) 七五四六M

松原 繁

ムスタীগアタ(七五四六M)は、中国の中心部を東西に横切る大崑崙山脈の高峰群としてコングール(七七一九M)、コングールチュビエ(七五九五M)とともに山脈の頭部にあった西端に位置している。

パキスタン、ソ連、アフガニスタン、インド国境に近いこの地域で、洛陽からローマを目標としたシルクロードの旅人は、長い旅の末オアシスの存在を示すこの白き峰を「冰山の父」として狂喜した。人々はこの白き峰を「冰山の父」ムスタীগアタと呼び、尊敬の念を抱いていた。

一九四七年、中央アジアの探検家として知

られるヘディン、スタイン、ティルマンとシブトンがこの山に挑んだが果たせず、一九五六年の中ソ合同隊によって西稜から初登頂された。その後世界の各国の登山隊により登られている。

私は一九八九年、ネパールのトレッキングから帰国した時、八〇〇〇Mの高峰に夢をさせていた。仲間も集まり中国との交渉を進めていたが、我々の予算と全く合わない予算書を送られて来た。一人二〇〇万円という金は、とても我々の仲間では無理である。八〇〇〇Mの夢がまぼろしに終わった頃、長野県山岳協会の会員の中で海外の山に関心を持つ山好きが集まる長野県海外登山研究会という組織があり、私もその会員の一人であるのだが、そこからある日一通の手紙が届いた。

出国から帰国まで三十日、予算五十万、山の高さは七五〇〇M以上の条件でエクスペディションを考えているかどうか?という内容であった。数多い山の中で、短期間でのタクテックスの条件としてアプローチが短く、岩稜でなく雪稜であること、しかも雪崩の危険が少ないこと、欲をいえばスキーが使えることがある。これらの条件にはまったのがムスタীগアタである。

これらのことは飯田山岳会の前沢昌弘さんを中心に進められていた。前沢さんは一九八一年、長野県山岳協会のガッツシャープルム一峰遠征の隊長でもあり、パキスタン・カラコルム山群に精通している人である。計画ではパキスタンのイスラマバードからカラコルムハイウェイを進み、国境を越えて中国に入るという。しかもカラコルム山群の眺望とギルミット、ギルギット、フンザなど若い頃にあ



ラカポシ(真珠の首飾りの意)パキスタン領

こがれていた地域のひとつでもある大陸をジープに乗って越えることも一つの夢であった。またムスタীগアタは山スキーが使える可能性が充分ある。過去の遠征隊も多くがスキーで登頂しているのである。たくさんの夢と期待をこめて、メンバーの一人として参加させてもらえることになった。

コーランの国から中国へ
パキスタンの首都イスラマバードへの直行便は七月の末からだということで、カラチで国内線に乗り換えてイスラマバードに入り、二日間を装備の調整や食糧の買い出しに費した。装備の一部は、パキスタン在住の日本人女性がオーナーであるシルクロードというエージェン트에預けてある日本隊の装備の一部をお借りすることができた。

七月十八日出発の朝は雷鳴と暗雲の中であった。日本隊のマイクロバスは同行のトレッキング隊員も含め十八名である。我々の隊荷はバスの屋根の上である。テレビで見た中近東の交通の姿である。いつ崩れてもおかしくない断崖をぬってインダス川沿いにさかのぼる中国政府が軍事上の関係で開いた道である。十二時間走り続けチラスに到着。インダス川

から吹き上げる風は熱風である。イスラム教の国の女性は、一部の職業を除き社会では働いていない。ホテルのウェイターも全て男性である。

七月十九日待望のナンガバルバート(八一二五M)、ラカポシなどカラコルム群の高峰に出合う日である。未知の世界にあこがれ、それが現実になるとき、人間の幸福と云う言葉を実感として味わうことができるのではないだろうか。まさしく期待どおりの圧感で、ナンガバルバートは姿を現わした。運命の山といわれ、世界の有名な登山家が次々に挑み、悲劇の歴史を積み重ねた。夕方には正面にラカポシピーク、背後にウルタルに抱かれたフンザのホテルに着いた。

この夜から私は、三十八・八度の高熱と下痢に一昼夜苦しめられてしまった。すっかり衰えた姿になった体にむち打つ?トレッキング隊に送られて、国境越えである。こまめに手ぬぐいで頭を冷やしてくれた仲間、私のためにわざわざ遠くから医者を手配して手当してくれたパキスタンの人達、そして貴重な注射を打ってくれたドクター...必ず登頂してパキスタンに戻ることを自分に言い聞かせて中国領に入る事ができた。

ベースキャンプ
国境を越えるという事で、国が変わることを肌で感じた。景色は変わり、言葉も、習慣も変わり、数々のトラブルも生れてきた。しかし、目指すムスタীগアタを目の前にし、私の体調も少しずつ回復に向かっている。なんとかベースキャンプに入ることができそうである。
ここで中国登山について、少しふれることにする。私は過去三回中国に渡った経験がある。二回は登山で、一回は仕事で五ヶ月北京に住んだ。二回の登山活動は、日中合同登山研究会によるものであり、中国に入ってから全て中国登山協会のお世話になった。
今回は直接我々が中国登山協会と交渉して、

概念図



(登山計画書より)



ベースキャンプへ向かうラクダのキャラバン

議定書を締結し、費用徴収規定に従い予算金額を全て支払い、入国したのだが、出迎えてくれた連絡官のスケジュール表は、我々の計画と異なっている点がいくつかある。しかし変更は全くなさくないことである。北京の登山協会から送られた行動表を新彊の登山協会が受け取り、現場に派遣される連絡官に渡されるとのこと、金にかかわる変更は許されない。異議があれば、北京の登山協会と交渉する以外はないことである。ちなみに二泊予定のホテルを一泊で追い出され、一泊はキャンプをせざるを得ないはめになった。

ともあれ、中国人三人、日本人七人、合計十八の隊員に対し、一人一頭で計算したラクダも、一人一頭半が現地の規定ということで、十四頭になり、さらに一頭の馬を加えてBCに向けてキャラバンの出発である。山へ入ると金も必要ないし、下界の雑念も忘れるだろうから早くBCに入った方が良く私は考えた。BCへのキャラバンは、標高三四〇〇Mから四三〇〇M、標高差一〇〇〇Mである。出発の騒ぎはいつも同じである。軽い荷物のうばいあい、このラクダはやせているからこ

れ以上は無理とか、バランスが悪いからこれは駄目とか、キルギス人と連絡官、通訳、現地のラクダ頭とのわたり合いである。私は四十分歩いて十五分休みのペースで先を歩き出した。三十分くらいで、ラクダ隊に追いつかれたが、彼らは、口笛をふいたり、ロバに乗ったりして我々を追い越して行く。四〇〇〇Mを越えても体の調子は良好である。国際登山祭も合わせて行われているムスタグアタのBCには数々の旗がひらめき、まるで北アルプスの湖沢のテント場と同じであった。ただ異なるのは全て外国人ということであろう。三日前に登頂したスペイン隊の夫婦にルイト、キャンプの位置、キャンプ間に要する時間、スキーと歩きの違いなど詳しいデータをいただいた。高所障害よりも体力と天気が勝負になるだろうと考えながら、ゆっくりと眠ることができた。

伊藤康徳、伊藤正両隊員は体調が悪いというので、おじいさんのボシの丘(キルギス人のパオ、三三〇〇M)へ下るといって、再会を約束して見送る。明日はCへ荷上げである。装備、食糧はキャンプごとに分けられ、いよいよ行動開始である。

計画ではC₁をABCにする予定であったが、高度差一〇〇〇Mながら日帰りが可能なことから全てBCを基地に行動することに計画は変更された。C₁の荷上げはスキーを含めて十九kgである。ゆっくり歩いて六時間もあればと考えたが五時間半でC₁の予定地に着いた。他の三人はだいたいおくられているが予定通りC₂の一部とC₁の必要物資はデポジットすることができた。私の体も全快に近いことに気を良くして楽しい一日であった。BCではヨーロッパ隊(スペイン・ドイツ・フランス・イタリア・スイス)とスキーのビンディングについていろいろ楽しい話をする事ができた。我々と同じ用具だったことにも、心強さを感じた。

七月二十六日、C₁を建設し一泊してC₂の荷上げである。初日から体調の良い若いパートナー、小林昭男君と二人である。二十五才で私の息子とそれほど年が違わないこともなにか楽しい気分である。C₁から頂上に向かい左側をトラバースしクレパスの多い雪の斜面を上り、大きなセラック上部に出る。私はスキーを使うべく考えていたが、小林君はあまり気乗りしないようだ。この後の行動中、C₂のデポ地とC₁の間でスキーは使わなかった。クレパスの多い氷河の登下降にはスキーは有効のほずであったが、失敗すれば一〇〇Mの断崖である。目標の六〇〇〇M地点には、とても登ることはできない。韓国隊のC₂の見える地点にC₂用の荷物をデポしてBCに帰る。次の日、隊長以下二名でC₂のデポ地まで荷上げが完了した。

七月二十六日、C₁を建設し一泊してC₂の荷上げである。初日から体調の良い若いパートナー、小林昭男君と二人である。二十五才で私の息子とそれほど年が違わないこともなにか楽しい気分である。C₁から頂上に向かい左側をトラバースしクレパスの多い雪の斜面を上り、大きなセラック上部に出る。私はスキーを使うべく考えていたが、小林君はあまり気乗りしないようだ。この後の行動中、C₂のデポ地とC₁の間でスキーは使わなかった。クレパスの多い氷河の登下降にはスキーは有効のほずであったが、失敗すれば一〇〇Mの断崖である。目標の六〇〇〇M地点には、とても登ることはできない。韓国隊のC₂の見える地点にC₂用の荷物をデポしてBCに帰る。次の日、隊長以下二名でC₂のデポ地まで荷上げが完了した。



コングール・チュビエ(7,595M)

七月二十六日、C₁を確保するために三回目のC₁入りである。最初に比べたら一時間も早くC₁に入ることができ、ベストに近い体調である。中平重治隊員と東尾崇隊員のサポートを受けてC₂のデポ地に到着した。しかしここで考えてもいなかったアクシデントが待っていたのである。五六〇〇Mのデポ地でC₂用の食糧が流されていのである。内容の

多くは行動食と主食のラーメンである。そのラーメンがスープ以外はすべて無いのである。二十八食の即席ラーメンはカラスの餌になっってしまったのである。

これですべてが終りかとガックリ肩を落し落胆する隊員もいたが、しかしまだC₂の途中である。BCには多くの登山隊がいるし、昨日は日本山岳会の学生隊も到着しているはずだ。なんとかなるかと全員を元気づけるが、なんとも不安である。無線でBCの隊長に現状連絡し、アタック食の手配をお願いする。なんとC₂を五八五〇Mに設営し、中平、伊藤、東尾隊員はBCに下山する。インスタントおこわとスープで夕食をすませ、テントの中でゆっくりと横になる。テントサイトの整地とガンバリ過ぎか、一人であまり働くとこなるよ、というように、激しい吐気におそわれる。頭痛はあまりないが、自分の意識はどうかいろいろ考えをめぐらしている時に、無線に日本語で「現場着」という言葉が入ってきた。何かアクシデントではないだろうかと心配しながら、明日のC₂建設の成功を祈り、眠りについた。

天気は快晴である。いよいよスキーの実力発揮である。広い大きな斜面を効率よくルートを取ることが要求される。所々に他の隊の赤旗が見える。出発から四時間半で韓国隊のC₂を過ぎて、六四五〇MにC₂を設営し、いよいよスキー滑降である。こんどC₁にくる時はアタックの時である。C₂まで三十五分であった。実に満足である。そのままC₂のデポ地にスキーをデポして、四十Mのザイルでタイトロープを結び、BCに無事下山である。先日の無線は東尾隊員が十五Mほどクレパスに落ちて、C₁から前沢隊長と伊藤隊員が救助に向かい、無事助けて夜半にBCに帰った連絡であったことも知らされ、幸運を喜びあった。二日間休養しても八月三日いよいよアタックである。カラスに盗まれた食糧も補給され順調に荷上げは完了した。



ムスターグ・アタ(7,546M)

右前方に岩稜の小山が見えてきた。赤布はついていないが竹が一本立っている。嬉しい。人間の行為の痕跡である。七二〇〇Mである。ここで二日間ビバークして、バラバウントに成功したドイツ隊の標識であろうか。しかし両手、両足に凍傷を負い下りて来たドイツ隊

の一名にC₁であっている。あと三五〇Mである。二時間ある。最後の力をふりしぼりながらあえぎあえぎ登行を続ける。一九八六年のチャンツェも同じ高さである。あの時はもつと楽に行動できたような気がする。風は相当強くなったが、追い風である。シングラスをかけているが左目が少しかすんで見えるようになる。右手の中指と親指の先に少ししびれを感じてきた。頂上はどこだ。まだ先なのか。女神はほほえんだ。無宗教の私に女神はないだろうが、青空に雪原が消え雪をかかえた強風が巻き込まれていく。頂上だ!! 頂上の反対側は断崖絶壁である。だから風が巻き込んでくるのだ。ついに立った。六時四十一分である。強風の中にスキーを立て、長野冬季オリンピックの旗をくりつけ、記念のシャッターを五枚切った。証拠は何もない。頂上の標識があるはずは無く、過去の遠征隊の報告書にもこのへんだらうと書かれているのが多い。高度計は七六〇〇Mを示している。テントを出てから六時間四十分である。勝利という喜びはあまり感じなかった。もう苦勞をしないで済むということ、降りる時にはずつと楽になるだろうという思いでいっばいだった。

BCに無線で登頂の報告をして下降にかかである。ルートを間違えて下り過ぎると大変なことになる。日本の山でもにがい経験を何度もしている。シルをつけてゆくり下りること。登ってきたトレースは全く消えている。しばらく下って、自分が今、大きなセラックの入口の雪壁の上部にすることに気付いた。左に寄り過ぎたのだ。時間は過ぎていく。六八〇〇Mのザックのデポ地はどこかわからない。無線で自分が今、迷っていることを伝えるが、C₂で私を発見するのは無理な話である。風が少し弱まってきた。左目はだいぶかすんでいるのだが、上部に大きなセラックが見えるような気がして近づくと、それは登

頂上アタック
C₁、C₂、C₃の三つのキャンプは、小林君と二人でトップで設置できた。頂上アタックには何の不安も無い。闘志が先走るのを押さえて、ゆっくりゆっくり、今回は二度とここを登らなくてもいいのだと自分に言い聞かせC₁に一泊、C₂に一泊、C₃に一泊である。しかしC₃から頂上までは一〇〇Mの標高差である。スベイン隊はC₃から頂上まで八時間を要したという。一時間に一〇〇M高度をかせぐと十一時間を要することになる。それには朝九時に出発しなければ隊長命令の七時登攀ストップは守れないことになる。ちなみに中国時間には時差はなく日本時間と同じであるが、四時間の時差と考えると我々は行動しているので、PM七時は日本時間PM三時頃である。

朝起きた時から小林君はあまり調子が良くないようである。出発時間を一時間、また一時間と延ばして、最終十二時に出発することにする。高所の経験があったり、自分の力を信じていたりするとアクシデントにみまわれやすいが、若い人は素直に自分の状態を打ち明けてくれるので適確な行動を取ることができ

きる。小林君は今回は七〇〇〇Mが目標だという。トップをねらう者と七〇〇〇M目標の二人がアタックに出发したら、おのずから差がつくのは明らかである。出発から一時間半、すでに一ピッチ彼は遅れてしまった。風も少なく天気の状態は良好である。三十歩進んでは十五歩分休むペースで、一時間に一五〇M高度をかせぐことができる。六八〇〇M地点で小林君は、視界にはなく、無線でこれから一人で頂上に向かうことをC₂に連絡し、赤旗をたてザックをデポして、無線機、小型カメラ、知事から預った長野冬季オリンピックの三角旗と行動食二日分のBCで下着も全て新しいものに替えた。高所用装備での行動のためか、焦りのためか、体が汗ばんでくる。大きなセラックをまわり込んでその上部に出ると、高度計は七〇〇〇Mを指している。三時間四十分を要している。ザックをデポした六八〇〇Mからピッチがあがっていることは意識していたが、あと五四六Mである。時間はある。眼前には頂上に続く雪原が続いている。ポケットから行動食を取り出した時、足元の雪がバサツと音をたてて落ちた。クレバスをまたいで立っていたのだ。スキーの功である。いままでもいくつこの上にもクレバスはあるだろう。この時から妙に自分が落ち着いてきて、計算式は成り立った。答えは、明るいうちにC₃に帰ることが可能であるということである。この一歩で、もう同じところで同じ行為はしなくても良い。一歩、一歩スキーをすべらせて自分に言い聞かせる。

戦いは終わった。自分の我儘なロマンのために多くの人が力を貸してくれた。妻や子供達、おふくろや兄弟、多くの山の仲間や友達、そして勤務先の社長や同僚達、この機会を与えてくれた飯田山岳会の人達、ベースキャンプで祝ってくれた外国の山仲間達。生きていく価値感にまた一つ加えることができた遠征であった。(大町山の会 会長)



登頂終了後ベースに戻る筆者(右)

山と博物館第36巻第9号

一九九一年九月二十五日発行
発行所 長野県大町市 TEL0260-211
大町山岳博物館
印刷所 長野県大町市俵町
大糸タイムス印刷部
定価 年額 一、三〇〇円(送料共一切手不可)
郵便振替口座番号(長野四一三九九三)